

| 項目 | 取組状況  |
|----|---|
| 教育 | <p>◆ 平成31年度(=2019年度=2019年4月~2020年3月)担当科目</p> <p>国語(大阪府大高専・本科3年)</p> <p>特別研究(前期)(大阪府大高専・本科3年)</p> <p>特別研究(後期)(大阪府大高専・本科3年)</p> <p>日本文学(大阪府大高専・専攻科2年)</p> <p>文芸創作演習1(京都造形芸術大学・通信教育部)</p> <p>◆ 担当科目の取組状況(工夫・改善した点)</p> <p>①自作プリントの改訂</p> <p>平成30年度(2018年度)より、大阪府大高専・本科3年「国語」の教科書を『はじめての評論文 20選』(明治書院、2011)から『読解 評論文キーワード 頻出225度&amp;読解演習50題』(筑摩書房、2013)へと変更した。この変更に伴い、平成30年度(2018年度)の期間に、3年国語の授業で用いる小テストならびに評論文読解プリント30回分をすべて作り直し、授業で使用した。平成31年度(2019年度)は、昨年度作成・使用した教材を昨年度の授業での反省を踏まえて改善しつつ、継続して使用した。</p> <p>②「抽象」「具体」「類似」「差異」というキーワードを繰り返す授業</p> <p>平成30年度(2018年度)に引き続き、大阪府大高専・本科3年「国語」では、日本語運用能力が高い受講者にも低い受講者にも意義ある授業はどのように可能か、を常に考えつつ授業運営した。学生には、論理の「構造」をよく考えるよう強調し、「抽象」(まとめると)「具体」(たとえば)「類似」(似ている)「差異」(違う)の4つのキーワードを強調しつつ授業した。ひとつのまとまった文章やプレゼンテーションの中で、対象がどのように抽象化されているか、あるいは具体化されているか、抽象をさきに述べているか、いきなり具体からはじまるのか、それによる効果はどう違うか、などの問いかけを授業では頻繁に繰り返した。また、同様に、ひとつのまとまった文章やプレゼンテーションの中で、対象がどのように類似するものと差異化して語られているか、あるいは独立したふたつ以上のものがどのような類似によって結びつけられているかも、繰り返し受講者に問うた。加えて、あるひとつの文章と類似した点がある文章を「重ね読み」(国語教育学者・大村はまの用語)して差異を考えさせる実践や、ひとつの文章で示された内容に似た具体例(類似)を独自に考えさせることで思考力を鍛えようとする実践も頻繁に行った。</p> <p>③特別研究(前期)におけるフィードバック</p> <p>大阪府大高専本科3年「特別研究(前期)」では、平成31年度(2019年度)は「2025年、大阪万博」を学年共通の大枠テーマとして設定し、筆者をふくむ4名の教員でこれを担当した。研究入門の授業として、問題の見つけ方に関する相談に頻繁に応じたほか、報告書やプレゼンには多くのコメントを与え、フィードバックした。</p> <p>④特別研究(後期)における成果展示を取り入れた授業展開</p> |

大阪府大高専本科3年・「特別研究（後期）」は、大阪府大高専の一般科目教員16名が各自設定した大枠のテーマのもとに配属され、学生が個人で研究を進める授業だが、筆者は、「自分だけの料理ノートをつくろう」をテーマとした。受講学生にそれぞれ半年間の料理テーマをさらに細かく設定してもらい（例・きのこを使ったお弁当）、各自家庭で8回料理に取り組み、それを記録してもらった。記録した成果は、「料理ノート」としてまとめ、学期終わりに学内で展示を行い、好評を得た。また、料理エッセイ（例・檀一雄『壇流クッキング』など）を学生と読む時間を設けることで、料理ノートの文章の参考とさせるよう努めた。

⑤「小説技術」を意識しながら読み、また、その「技術」を使う練習

大阪府大高専専攻科2年「日本文学」においては、漱石「三四郎」を「技術と構造」という観点から半年かけて精読し、期末レポートは「「三四郎」の二次創作」を課題とすることで創作者の目線から作品を捉える視点を教授しようとした。

⑥京都造形芸術大学・通信教育部・文芸コース「創作演習1」でのフィードバック

京都造形芸術大学・通信教育部・文芸コース「創作演習1」では、学生から送られた創作文へ詳細なコメントを付して返すことで、文章を書く際の基礎的技術を教授しようとした。

◆ 特記すべき教育方法の実践例

①抽象・具体、類似・差異をキーワードとし、構造的に理解し、なおかつ表現する練習

3年生の国語では主に評論文を扱っているが、授業の方法的根拠として、具体（たとえば）抽象（まとめると）類似（似ている）差異（違う）をキーワードにし、これらの言葉を用いて、文章の構造的な理解を促そうとしてきた。国語の授業で重視するキーワード4つをあらかじめ受講者に示し、1年の授業を通じて継続的な方法的根拠とすることで、文章の内容への理解だけではなく、構造を重視して文章を読解し、書くことへ応用する能力を養おうとした。

②上記①の発展としての「別の具体例」の実践

上記①の考えを発展させ、本文に挙げられているのは「別の具体例」を考えさせ、クラス全員にアイデアを言ってもらおう実践を行うことで、授業を活発なものにし、「アイデアをひらめく力」を刺激しようとしてきた。

③モジュール学習の導入、「今日の文章」の試み

国語では、小学校の英語教育などにおいて導入が推進されている、モジュール学習（帯学習）の考えを授業に取り入れ、実践した。改めて確認しておけば、モジュール学習とは、授業時間を細かく区切り（たとえば45分授業を15分×3のモジュールとして捉えるなど）、授業時間全体でひとつのことをじっくり教えるのではなく、短い区切りによって展開される学習を一定期間継続することで効果を上げようとする教授法である。具体的には、毎回、ウォーミングアップのように、近代古典から筆者が選んだ文章を学生と読んだ。その際には、受講者に二人組になってもらい、一文ごとに交互に読みあう手法（いわゆる国語教育で「まるよみ」と呼ばれている方法）で、必ず音読もさせている。授業で扱う文章は、すべて筆者が独自に選び、教材化した。例）杉田玄白『蘭学事始』、福沢諭吉『福翁自伝』、ヘミングウェイ「ふたつの心臓の大きな川」、ブルースト『失われたときを求めて』、漱石『硝子戸の中』、鷗外「サフラン」、坂口安吾「ラムネ氏のこと」など

|    |   |
|----|---|
|    | <p>③創作文執筆を授業に取り入れる試み</p> <p>京都造形芸術大学において担当してきた「文芸創作演習 1」や、大阪府立大学工業高等専門学校において担当してきた「言語と文化」「日本文学」などの文学系の授業では、小説技術を体感的に理解してもらうために、創作文執筆を積極的に取り入れてきた。たとえば、「黙説法をラストに用いたショートショートを書こう」や「漱石『三四郎』の特定の場面を二次創作しよう」などの課題を学生に与え、全員で全員のものを読み、議論し、授業を活発かつ双方向的なものにしようと努めてきた。</p> <p>◆ 校長顕彰などの受賞<br/>該当なし</p>  |
| 研究 | <p>◆ 平成 29～31 年度（＝2017 年 4 月～2020 年 3 月）における研究業績</p> <p>■ 学術論文執筆</p> <p>①吉田大輔「幸田露伴「御手製未来記」(1911)における商業アイデア：その文化史的・産業史的意義の一端について」『比較文学』62 巻、日本比較文学会、pp.51-65、2020 年 3 月（査読あり）</p> <p>②吉田大輔「ものをつくることを書く、ものをつくるひとを書く ——幸田露伴について——」大阪大学大学院・文学研究科・博士学位申請論文（14401 甲第 20639 号）、原稿用紙換算約 440 枚、2019 年 12 月</p> <p>③吉田大輔「大阪府大高専・3 年次・国語における 4 つのキーワード「抽象」「具体」「類似」「差異」の実践」『大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要』52 号、pp.35-46、2018 年 12 月</p> <p>④吉田大輔「坂口安吾「ラムネ氏のこと」における名詞 ——幸田露伴「文明の庫」「頼朝」森鷗外「サフラン」との対比から——」『京都造形芸術大学研究紀要= Genesis』22 号、pp.96-106、2018 年 11 月</p> <p>⑤吉田大輔「幸田露伴の少年文学「鐵の物語」の英語典拠」『京都造形芸術大学研究紀要= Genesis』21 号、pp.58-67、2017 年 11 月</p> <p>■ 国際会議での発表<br/>該当なし</p> <p>■ 学術講演会での発表</p> <p>①（博士学位論文・公開審査）吉田大輔「ものをつくることを書く、ものをつくるひとを書く ——幸田露伴について——」、主査・橋本順光教授（大阪大学）、副査・中直一教授（大阪大学）、副査・出口智之准教授（東京大学）、大阪大学大学院・文学研究科、2020 年 1 月</p> <p>②吉田大輔「明治末期・少年むけ未来記のリアリティ——幸田露伴「御手製未来記」(1911)における『実業少年』の欧米記事利用——」日本比較文学会第 81 回全国大会、北海道大学、2019 年 6 月</p> |

|      |  |
|------|--|
|      | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 特許<br/>該当なし</li> <br/> <li>◆ 平成 29～31 年度（2017 年 4 月～2020 年 3 月）における外部資金獲得状況<br/>該当なし</li> <br/> <li>◆ 学会などでの受賞<br/>該当なし</li> </ul>  |
| 社会貢献 | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 平成 29～31 年度（2017 年 4 月～2020 年 3 月）における公開講座・出前授業の取組状況<br/>該当なし</li> <br/> <li>◆ 平成 29～31 年度（2017 年 4 月～2020 年 3 月）における学協会等の委員<br/>該当なし</li> <br/> <li>◆ 特記すべき社会貢献の内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>①公立大学法人大阪府立大学・理事長表彰、2018 年 8 月（②の業績に対して、授与された）</li> <li>②ショートショートフィルムフェスティバル&amp;アジア、第 4 回・ブックショートアワード大賞（短編小説の賞、筆名・入江巽、作品名「名前って、二つ以上の鐘の音」）、2018 年 6 月</li> </ul> </li> </ul> |